百花二

忘瓦亭日録

宮 林二

立風書房

校

忘瓦亭日録奥付　昭和五十三年四月二十日印刷　昭和五十三年四月三十日初刷発行　著者宮柊二　装幀者前川直　発行者下野博　発行所立風書房　東京都品川区東五反田三丁目六番十八号　電話東京局（四四七）一一九一番（代表）　振替東京五―七四四九三　印刷所信毎書籍印刷株式会社　製本所大口製本印刷株式会社　定価三五〇〇円

忘瓦亭日録　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

友への便り　七
兵隊の桎梏から抜けられず　九
友への便り　一三
酒　一四
火のまつり　一六
たたかひに死なばくやしからめど　一九
たまたま法然の歌など　二五
忘瓦亭日録――歌と詩の彼方へ――　三三
あとがき
初出一覧

忘瓦亭日録

口絵　草野　心平
装幀　前川　直

友への便り

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

兵隊の桎梏から抜けられず

リウマチと糖尿病が私の持病で、リウマチは三年前にそう診断された。糖尿病のほうは勤め人であった昭和三十年代に、つまり私の四十歳代の発病で、二十年以上の病歴をもつ。糖尿病は、前後二回ほど入院加療をしたが、この二回目の入院のときリウマチの血液検査を受けた。もっとも前年から手足や腰に痛みが出て難渋したが、専門の医師から、リウマチは糖尿病と関わっていはしまいかという見立てで、東大物療内科に出かけて受診したのであった。「まだあごにまではきていませんね」といわれた。

リウマチがあごにくるとはどういう状態なのかわからなかったものの、私の心理的ショックは相当なものだった。手首の痛みに耐えられず、手の甲に注射を二、三回してもらったことがある。また、背中が痛み出して、病院のベッドに眠られないこともしばしばあった。その後、リウマチには金治療を、糖尿病にはインスリン注射をしてもらい、いまに及んでいる。

前者は月に二回、後者は毎朝である。私は注射が大きらいで、若いころから単なる疲労回復

のためでも注射といわれれば逃げ出すのであったが、それがいまは毎朝自宅で注射を受けている。注射を受けるとき、痛くて口惜しい。

話はもどるが、入院していたとき、こんな歌を詠んだことがあった。

採血の済みたる耳を抑へ戻る二十年かく切られの柊二　(1)

今日ひと日体痛みてつらかりき交響楽「英雄」流る　(2)

薬また変りし因(もと)をさまざまに詮索し想像し懈(たゆ)し心は　(3)

コップ二つ落し割りにき今宵三たび落さんとしつ手首利かねば　(4)

(1)の歌、切られの与三郎ではないが、糖検査のため、耳を切られて採血されて病室にもどる歌である。それが二十年間続いているという自嘲。(2)は、病院では昼食の休憩時に音楽を流す。偶然に「英雄」だったので託して負け惜しみをいったのである。(3)は施薬がときに変わるので、病状を疑心暗鬼した。(4)はリウマチで手首がきかないところから、こういうことが続き、われながら情けなかった。

こうしたからだの具合から、病院では痛みを和らげるため、個室で朝から入浴してもいいように特別の配慮をしてくれたが、手首が痛んで浴室の扉のノブは回せず、給湯栓の蛇口もひねられず、さらに下着を脱ぐのも自分でできなかった。

病院では看護婦さんに手伝わせようといってくれたが、私のほうから遠慮することが多かった。もっとも午後または夕刻になると、郊外の自宅から家内がやってくるので、その時刻を待って入浴した。

現在は退院してから三年ほどになるが、病状は当時よりはずっとよくなっている。外出をつつしみ、不義理を重ねながらも自宅の籠居を続けている。内臓関係は丈夫で疾病がないようだから、手足の不十分なのと糖尿病の一進一退に注意していれば、何とか日を過ごしていけるようである。眼底出血を三回やっている。今日病院で受けた眼底検査の結果が少しく気がかりだが、いちど経験した角膜ヘルペスのような痛みはない。

私の亡父も亡母も、長い臥床生活の末に逝ったが、特に父はよほどでなければ医師を呼ばず、クスリも服用しなかった。私も何となく父母の性質を継いだようで、いくらかそういう傾向がある。いまは医師を尊い人と思うようになっているが、医師の指示を必ずしも守り通さず、そのわがままを医師から叱られることが多い。兵隊として無事生還し得たのはうれしいが、まだ兵隊の桎梏(しっこく)から抜けられないでいるような気がしないでもない。

友への便り

松の実を貰ってきました。この実を食べると、たいへん体力がつき、顔などは若者のようにつやつやしくなるそうです。みたところは普通の松笠ですが、やや長くて大きさは五倍ほどもあります。朝鮮五葉松の実だと聞きました。

今朝、帯広飛行場に見送ってくれた熊代弘法とおっしゃる先生にいただいたものですが、雪で飛ばない飛行機を待合室で待ちながら、いろいろなお話をうかがいました。

日高山脈中のこの朝鮮五葉松の実や鬼くるみは、栗鼠や山の獣が好むものだそうですが、繁殖した山の鼠たちがそれらの木の若芽なども嚙るので、殺鼠剤で鼠たちの撲滅をはかったそうです。それで鼠が減ると、食いものの少なくなった狐たちが餌を求めに人家ちかくへ出てきたそうです。人間がその狐たちを不憫に思ったか可愛がったのか餌付けをしました。すると、そのうちに狐たちは自分で山の鼠などの食いものを獲る力を失い忘れたそうです。イソップ物語にでも出てきそうな話ですが、現状の実話だと申します。熊代先生は、日高山中の小さい分教

場に自分から申し出て転任し、ひとりで絵を描いておいでだそうです。栗鼠たちは朝鮮五葉松の実をじつに巧妙にほじくり食むそうです。栗鼠たちのあとに行って、栗鼠の食み残しの木の実を先生が拾うのだそうです。

また、きのう帯広から大雪山中の然別湖へ行く自動車のなかで、友人の話を

山中に老いたるきつね毛の白く変りて冬の径往くといふ

などという他愛もない一首に詠みましたが、帯広飛行場の待合室には白に近い、灰白の毛のエゾ鹿三頭の剝製がありました。先生にお尋ねすると、狐も鹿も冬期には毛が白くなると、私のはじめて聞くことを申されました。

ところで、冒頭に述べました「松の実」、すなわち朝鮮五葉松の松笠を一箇お分けしましょう。一箇だけでは、精力の倍増もそんなに期待はできないでしょうが。

酒

昔からとりたてて何かに凝ったことはない。ただ、酒だけは身辺について回った。病気の一、二年間を除いては……。

私が飲めるようになったのは、まったく北原白秋先生のお陰である。先生はシラフの時には、「君はオレの最後の弟子だから、悪い所には連れていかんよ」などと、もっともらしいことをいわれていたが、いったん酒が入れば、「酒も飲まないで歌はうまくならんよ」と、まさに君子豹変して、一度飲みに出かければ、二、三日は帰ってこないというようなこともザラであった。

とにかくそのころは白秋に限らず皆よく飲んだもので、詩人・画家・音楽家などが、渾然一体となって飲み明かす、というようなこともしょっちゅうだった。私なども大木惇夫さんの所に泊りこんで、夜になるとチマタに出陣し、朝になると帰ってくる……を繰り返したものである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com